

愛の三部作

# 女の難しい話

著 合成写真



「こんにちは赤ちゃん。」とつぶやいてみたが、何かが違う。何かを間違えている。しかし、間違えているけれど間違えてないと思います、そういう風に僕は考えることにした。僕の名前は「赤ちゃん」だ。しばらくの間は「赤ちゃん」ということにしよう。結局のところ、名前などどうでもいいことなのだから。ほんのしばらくの間、この名前でいよう。急場しのぎの名前など、どうせすぐ忘れてしまうだろう。

ところで、吐きそうだ。もう吐かないではいられない。実際、少し吐いている。タライに3cmぐらいは吐いている。僕がこのような弱みを見せてしまうと、すぐに狡猾な人間たちが集まって攻撃を仕掛けてくるのだ。厄介な世の中だ。攻撃的な人が多すぎて、少しの失態も許されない。今のこの状況では、右にいる男、そして左にいる女、こいつらが特に攻撃的だ。男は攻撃的な髭。女は攻撃的な太もも。こいつらの近くにいるだけで僕は十分なダメージを受けてしまう。僕は防御するだけで手一杯で、しまいには吐いちゃうことになる。

吐くという典型的な弱さアピールをするべきじゃないのは知っているけど、あいつらは攻撃的でどうにもならなかった。攻撃的であるとはどういうことかということ、これが説明がつかないほど攻撃的だということだ。そんなことするべきじゃないのに吐いてしまうほどだ。僕は吐きながら右の男（髭）と左の女（太もも）を観察した。観察しないと二人の攻撃を防御することができないからだ。孫子の兵法書にもそう書いてある。



髭は太ももを口説きたいようだが、真ん中に吐いている男、つまり僕がいるのが酷く迷惑だと感じているようだ。そのくらいのことで髭は怒りに震えてしまう。髭は長いのに短気なのだ。髭はとても長いのに短気なのだ。短気であることは女にモテない条件の一つであると髭は考えているので、できたらそのことを太ももに知られたくない。知られたくないもんだから、長い髭を振り乱さないように、静かに真ん中の男、つまり僕を睨みつけてくる。怒髪天を



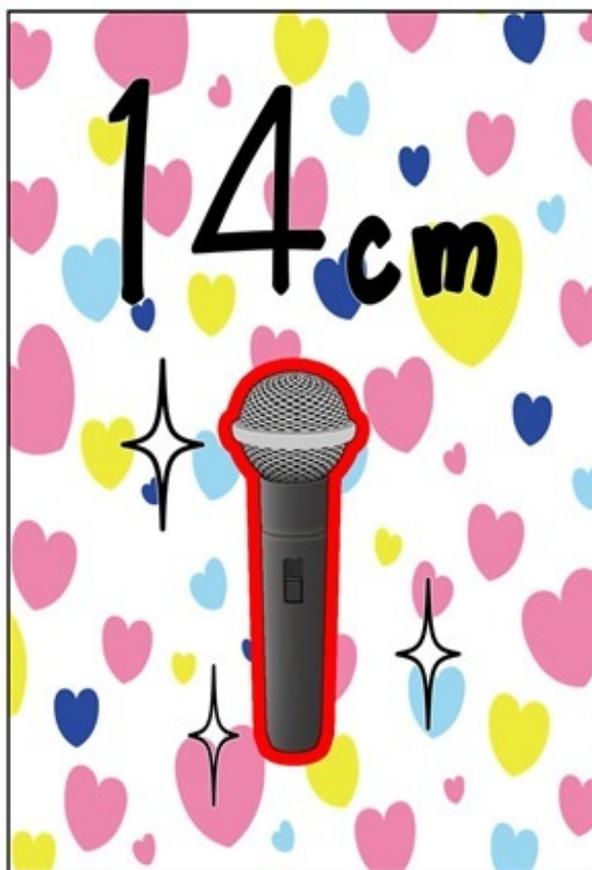
衝くというが、この場合、怒髭天を衝くという感じで、あまりのプレッシャーに僕はまた吐くことになる。

太ももは太ももで髭に気があるらしいことが詳細な観察から判明し始めている。なぜなら、ご自慢の太ももを何とかして長い髭に近づけようと必死になっているからだ。髭が太ももに触れたら、二人は恋に落ちる、あたかもそのような啓示が二人に降り立ったかのようなようだった。しかし、真ん中に吐いている男、つまり僕がいるし、足元にはもう6cmぐらい汚物がたまってしまったタライがあるし、どうにも二人の恋はうまくいかない。僕のせいだ。だいたい真ん中に恋路の邪魔者がいると相場は決まっている。孫子の兵法書にもそう書いてある。僕はそのことを考えると益々吐いてしまう。

真ん中の男、つまり僕のことだが、真ん中の男を蹴ってもいいと女は思っている。女も短気なのだ。太ももは太いのに短気なのだ。太ももはとてもいい感じに太いのに短気なのだ。タライの高さは14cm、まだ吐いても溢れることはない。タライに余裕があることを髭と太ももは心得ている。それを分かっているのは僕だけだ。

僕には余裕を感じる余裕がない。というのも吐き通しだからだ。そんな状況でも僕の観察力は衰えない。今は僕の観察力がタライの高さ14cmについて考察しろと言っている。14cmか、どこかで聞いた長さだ。しかし、僕は思い出せない。思い出せないそれはそれで吐いてしまう。僕のペニスは12cmだ。14cmあると周囲に漏らしたことはあるが、それは事実ではない。右にいる男、彼は14cmかもしれない、髭の長さからいっても14cmはあろうかと思う。私の観察力からいってもそれはたぶん間違えのないことだ。おそらく孫子の兵法書にもそう書いてあるだろう。

ここは髭のペニスの長さを太ももに聞いてみることにした方がいいに違いない。なぜなら、太ももは髭に気があるので、髭のペニスのことを1604回は考えただろうことは想像に難くないからだ。太ももと髭とペニスがいっしょくたになる夢を1604回はみたに違いない。だからこそ、髭のペニスのことは太ももに聞くのが一番であると思われるのだ。孫子の兵法書にもそう書いてあるだろう。し



かし、僕はいつも吐いてしまうほどの小心者だ。太もものような輝かしい女に話しかけたことなど一度もない。僕が話したことがある女性は後期高齢者に限られる。

僕は女とどのように喋ればいいのか全くわからなかった。誰かに女と話す方法を尋ねる必要がある。女に詳しくそんな髭に聞いてみようか。あの髭の長さは女に詳しいということ周囲にアピールしているようなものだ。ほとんどの場合、髭＝女に詳しい、という方程式が成り立つ。僕の短い人生で出会った人物の内、髭が生えている者は軒並み女に詳しくかった。髭が女を呼び寄せるのだ。あの髭の一本一本から何らかのホルモン、情熱ホルモンが醸し出されているのだ。

僕は吐きながら、勇気を振り絞って髭に話しかけることにした。髭に女と喋る方法をレクチャーしてもらい、その後に習いたての女と喋る方法を実践して、太もものに話しかけて質問をするのだ。「髭のペニスの長さは何cmか知っていますか?」、これで完璧だ。僕が多少吐きながら話しかける素振りをする、髭の怒りは頂点に達した。

「俺に話しかける前に、吐くのをやめろ。」

髭はもっともなことを言った。

もはや髭の愛人と化している太ももはそれに同調して、

「吐くのをやめろ」

と僕を蹴った。

太ももが僕を蹴った拍子に、履いていたハイヒールがタライまでも蹴り倒してしまった。中からこぼれ出る汚物とリンゴ。樂園に噴出した原罪。太ももはハイヒールに汚物がかかっているか確かめた。身だしなみを整えることはいい女の条件だからだ。

「髭さん、幸い私のハイヒールには汚物がかかっていませんでした。」

太ももは自分が清潔であることを髭にアピールし、さらに自分の太ももが髭に接触するように何とか近づこうと必死になっていた。その言葉を聞き終える前に、髭は僕への怒りのあまり、転がっているタライをさらに蹴り飛ばした。その拍子に髭の髭に汚物が付いてしまった。太ももは言った。

「髭さん、幸い私のハイヒールには汚物がかかっていませんでした。」

身だしなみを整えることがいい女の条件だ。僕はタライがどこまで飛んでいったか手持ちの望遠鏡で確かめた。

「バーカウンターの中だ」

僕は二人に聞こえるように言った。そのとき、雷鳴のように僕の頭の中にある一つの考えが浮かんできた。タライを蹴ったときの髭の股間の膨らみからいっても、おそらく髭のペニスは14cmはくだらないだろう。そう確信し始めるとさらに重大な事実には気が付いてしまった。僕は自分の観察力に驚愕した。観察する限り、太もものハイヒールの高さも丁度髭の14cmと同じだと思われるのだ。ハイヒールと比較すれば、髭のペニスの長さも確定できるだろう。僕は実証主義者である。どんなことでも確かめないと気分が穏やかにならず吐いてしまう。太もものハイヒールと髭のペニスを実際に比較してみたいと思う。しかし、女の太ももに頼むのは怖い。なので代替案を考えることにした。

ちょうどいいことに僕の12cmのペニスは、ハイヒールに蹴られた恐怖で7cmに縮んでいた。ち

ようど14cmの半分だ。これで比較し、2倍の長さがあれば、髭のペニスは14cmであることがわかる。

「すみません、髭さん、僕のは初めは12cmでした。これは偽りではありません。しかし、今では7cmです。髭さんは14cmという伝説があります。だから僕のものと比較して2倍の長さがあれば、髭さんのものは14cmであるということがわかるのです。これは学術的に大変に貴重な情報となります。ぜひ真偽を確かめさせてください。」

髭は太もものハイヒールのサイズとペニスのサイズが、同じ14cmであることを、ガラスの靴を履いたシンデレラを見つけた王子のようなものだ、と考えていた。僕は小心者だ、しかし、実証主義者だ、だから間髪入れずに告白した。

「髭さん、僕は自分のものの元の長さを12cmと言いましたが、本当は10cmです。すみませんでした。」

僕は吐ける実証主義者だ。そして正直者でもある。正直者は女にモテるのではないだろうかと考え、チラと左の女を眺めると、女は不満そうな顔をしていた。太ももは長さには鈍感だったが、太さに敏感だったのだ。太さについての説明が足りないと感じていた。太ももはタイヤから転がり出てきたリンゴを拾い上げた。

「このくらいの太さ、いや、これは大きすぎだわ。」

そう呟いたら太ももは気分が晴れてきた。14cmをもつ二人は同じ方向へ歩いていき、12cm、いや10cmの実証主義者はいつまでも吐き続けたのだった。そして、僕は自分の名前がなんだったかを思い出そうとしたが、どうしても思い出せなかった。



## 女の難しい話

目が覚めると目的の駅を通り過ぎてしまっていた。予想外の出来事に真っ赤になった。頭上には送電線が張り巡らされていた。どうしようか考えたが、どうしようもなかった。一眠りすることにした。でも一人で眠ることが嫌だったので、隣の人と眠ることにした。隣の方はアメリカ人だった。俺はアメリカ人といっても、アメリカ生まれの日本人です。ここは日本です。

「眠る前に、難しい話でもしましょう」。  
と、50歳に見える22歳の女が言った。

「別のアイデアはないのかい？」  
と、初老のアメリカ人は言った。

女「眠るためには難しい話が一番なのよ」。

初老「あなたの言うことよく分かります」。

女「じゃあ難しい話を話してよ、私は眠るから」

初老「OK! That's right!」



初老の男は難しい話を思い浮かべたが、簡単な話しか思い浮かばなかった。一番最初に思い浮かんだのは、プランターの植物が鳩に荒らされた話だった。初老が気が付いた時には鳩が最後の一突きを植物にする時で、鳩は初老の速度を範疇に入れて、ゆっくりと最後の一突きを植物に喰らわし、悠然と送電線に向かって飛び立っていった。初老は怒りでプランターの前に15分ほど立っていた。16分目もまだ立っていたかったが、20分目に達した時の徒労感を考えると、15分で怒りで立ち続けることと決別せざるをえなかった。だがこれはあまりにも簡単な話すぎる。余計なお世話だ。

その後、かろうじて思い浮かんだ難しい話は、人に話して聞かせるほどうまく話せなかった。難しい単語同士が衝突して、知り得る言語から逸脱してしまった。さすが難しい話だ。簡単にはいかない。簡単な話のありがたさが分かってきた。簡単な話なら、いくらでも浮かんできた。そこから難しい話にしようかと思ったが、それも難しかった。

それにしてもとなりの女、結構良い女だな。胸の谷間がこっちを向いてやがる。これは簡単に分かった。考える必要がなかった。ただ良い女が、「難しい話をしましょう」と言ったとき、考えなければならなくなった。隣の女を見るとすでに眠っていた。行きたい方向に行くために電車に乗ったのに、目的地を通り過ぎてしまい、どこに着くかももう分からなかった。女と知り合った今、目的地に引き返す気も起こらなかった。女の上着のポケットの携帯電話が突然鳴り出したが、女は目を覚まさなかった。



初老「もしもし」

初老の男は、悪いとは思ったが、携帯電話に出たのだった。

初老「もしもし」

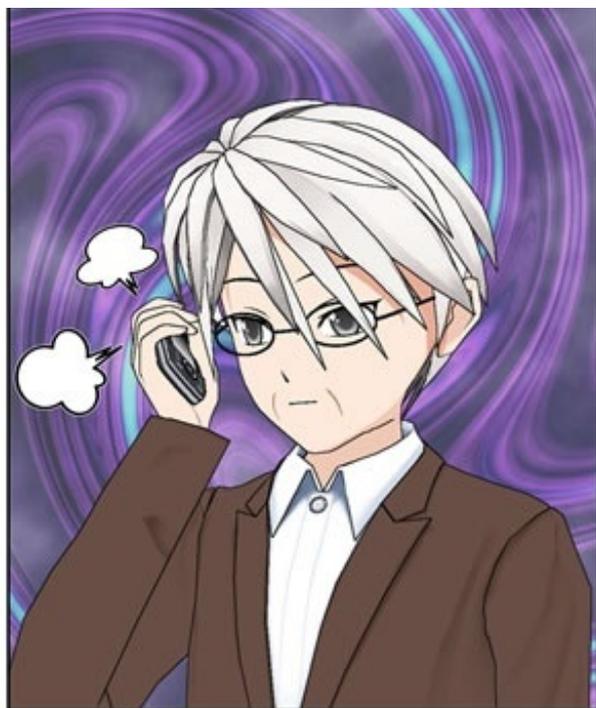
見知らぬ人「もしもし」

初老の男はもう一度もしもしと言おうとしたが、見知らぬ人が突然長々と喋り始めたので言葉を飲んだ。

見知らぬ人「今どこにいるんだい。もう37分も待っているのに、一向に来る気配がないよ。もう38分目なのに、一向に来る気配がないよ。昔々、あるところに、おじいさんとおばあさんがいた。おじいさんは山に洗濯に、おばあさんも山に洗濯に行った。ある日、おじいさんは、二人が別々のことをした方が効率が良いんじゃないか、ということに気付いた。別に同じことをする必要もないんだから、と、おじいさんは自分に言い聞かせた。しかし、おばあさんの楽しそうな顔を見ると、別々のことをしよう、とは言い出せなかった。「結構良い女だな」とおじいさんはおばあさんに対して昔思っただった。胸の谷間がこっちを向いてやがる。今も思っている。さすがに今は谷間なのか皺なのかも分からなくなったが。おばあさんは、山に洗濯に行くことは無いんじゃないかと思っていた。山は川よりも洗濯に不向きだからだ。」



初老「もしもし」



見知らぬ人「おばあさんはおじいさんを愛していたから、正直に川に洗濯に行ったほうがましである、と言った。「でも、おばあさん、今は川の時代じゃないよ。難しいことを話す女の時代だよ。女が難しい話をすると、ドキッとするよ。女の難しい話は楽しくて眠くならないよ。男が難しい話をしようとする、女はすぐ眠ってしまうけど」。おじいさんが隣を見ると、おばあさんは木の根本ですでに眠っていた。おじいさんは川に行く決心をした。おじいさんはすっかり毛という毛が脱落していた。山に洗濯に行くうちに男性ホルモンが活発になったのだ。35年前のことだった」。

初老「もしもし。あなたは誰ですか。何で私に昔話なんてするんです？ 私は初老でもう昔話はうんざりなんです。私自身が昔話なんです。昔話から飛び出るように70年も生きてきたんです」。

見知らぬ人「最近、あるところに、女子高生がいた。女子高生は学校に行くはずだったが、あまりにも疲れていたため、学校がある駅を通り過ぎてしまった。前の席で、22歳と初老が難しい話をしていた。私も常日頃から、女は難しい話をするときが美しいと思っていたので、二人に参加したかった。しかし22歳はすぐに眠り込んでしまい、初老は考え込んでしまった。突然鳴り出した22歳の携帯電話に、初老の男が代わりに出ていた。

初老が、「もしもし」と何度も言っていたことから判断するに、難しい話をしているようだった。私も難しい話の似合う女になりたい、そのためには一体何をすればいいんだろう。フェリスに入って3年もすれば、難しい話しか出来なくなるわ。女子高生は、難しい話をする女というのはどういう感じに思われるか、彼氏の意見を聞きたくなった」。

初老の男はきょろきょろと周りを見回したが、女子高生らしき人物は発見できなかったし、もちろんその彼氏も発見できなかった。頭上の送電線にすずめが止まっていた。初老が見上げると、慌てて飛び去っていった。すずめには何もかも分かっていたのだった。

見知らぬ人「女子高生は携帯電話を取り出し、メールを送った。すると初老の男の携帯電話が3回鳴った。「むずかしい話をする女って、タカピョンはどうおもう(^\_^)」。「タカピョンって呼ぶなよ(>\_<)」というメールが帰ってきた」。

どうでもいいやり取りだった。女子高生は携帯電話を送電線に止まっているすずめ目掛けてぶん投げた。携帯メールは難しい話をするには驚くほど不便だった（2001年現在）

初老の男は痩せさらばえた肋骨を擦った。22歳の女を満足させられる肋骨ではとてもなかった。女を満足させるためには骨の一つ一つの働きがとても重要だった。筋肉はその次の次元だ。世間一般、初老が語る筋肉ほど空しいものはない。10代が年をとったなあと笑顔で語っているのと似たようなものだ。

念のため、初老の男は自らの一物をもまさぐった。15年ぶりのことだった。15年間尿目的以外で使用されることのなかった器官は、15年目の変化にすぐに適応できなかった。一物はまるで良い女がそっぽをむくように、初老自身からもそっぽを向いていた。まるでまさぐられることなど心外だ、とっているような態度だった。

初老の男は自分が初老になるまでの長い歴史の、あだ名を思い返した。4種類のあだ名を思い出した。3種類は思い出したくもないあだ名だった。だが残りの1種類は、思い出深いあだ名だった。色分けすることは出来るが、説明は出来ない類いの話だった。色は赤。

見知らぬ人「昔々、若かった頃の初老がいた。若かった頃の初老は、女が難しい話をするとなんションがあがった。有頂天になって飲んでいて水を必ず全部飲み干した。しかし水の冷たさは、若かった頃の初老の男のテンションをまるで下げなかった。今の初老のテンションの低さは、電話越しでさえ相手のテンションを下げた。すべてがうめき声のように聞こえた」。

初老「もしもし」

女「あなたの「もしもし」が難しい話を間接的に感じさせたわ。でもそれは本当の難しい話じゃないのよ。何故なら見知らぬ人が話しているから。「もしもし。あなたにメールを送った女子高生は、4年前の私が、タカピョンに片思いしていたとき、押さずにはえられなかったメールアドレスへの告白を、見知らぬ人に送ったものなの」という一節が、あの高名な哲学者の本に書いてあったのよ」。

初老「もしもし」

タカピョンは女子高生から返事が来ないことに苛立っていた。いつも遅くても3時間以内には返信が来ていた。どのメールも可愛げがあるメールだった。タカピョンは女子高生のことを強く愛していた。返事が来ないだけで、タカピョンは気が滅



入り、死にたいような気分になった。だがタカピョンには難しい話は出来なかった。難しい話という尺度でタカピョンは計れない男だった。

見知らぬ人「もう73分も待っているのに……………」



## 愛人

東京を44歳の女が歩いていた。女はつま先立ちで歩いていた。体を鍛えるためだ。44歳の女はたるみきった皮膚を憎んでいた。つま先立ちで歩くことにより、爪が割れかけていたが、皮膚を優先することにした。44歳、それは皮膚と愛人を意識する年齢である。私は愛人が3人欲しい。今はいないが3人欲しいと思う。特に3人欲しいと思う。

1人目の愛人は、イタリア人が理想だ。毛深くてセックスが強いイタリア人。私の皮膚のたるみを吹き飛ばすのはイタリア人の陽気さとセックスが不可欠だ。よく考えたら、イタリア人となら皮膚のたるみを性技に使えるのではないだろうか。それ以前に皮膚をもう少し復活させなければ、1人目の愛人さえも危うい。

女は愛人のことを考えることで弛緩したつま先に再び力を入れた。2人目の愛人は野性的な男がいい。動物みたいな頭の悪い男。むしろ動物でもいい。ただし鳥は嫌だ。鳥以外の動物ならいい。鳥は愛人にしてもすぐに逃げられてしまう。リスクがでかい。ふっと私はヒヒが頭に浮かんだ。ヒヒは誰に尋ねて回っても「野性的」と言われるだろう。左にイタリア人、右にヒヒ。素晴らしい配置だ。ヒヒの右手には棍棒を持たせよう。なるだけ太い棍棒が良い。イタリア人の男根に勝るとも劣らないような棍棒。

しかし、イタリア人もヒヒみたいなものじゃないか。ヒヒもイタリア人みたいなものじゃないか。男根から遠ざかることが44歳の愛人との過ごし方ではないだろうか。男根のない愛、それを私は探していた。つま先立ちで。3人目の愛人については、考えるのは止めよう。

愛人のことを考えないとすると、いったい何を考えたらいいのかわからない44歳の女である。若くはない、若くはないがそう年老いてもいない。意外と身体もよく動く。時折軟骨がずれることがある。それでも周りに気付かれぬように音は立てたことがない。皺もさほどではないしセックスも強い。女は一瞬愛人のことを再び考えそうになった。特にイタリア人やヒヒの陰部のことを考えそうになったが、必死に違うことを考えようと努力した。愛。愛について考えよう。ヒヒからは遠ざかるのだ。

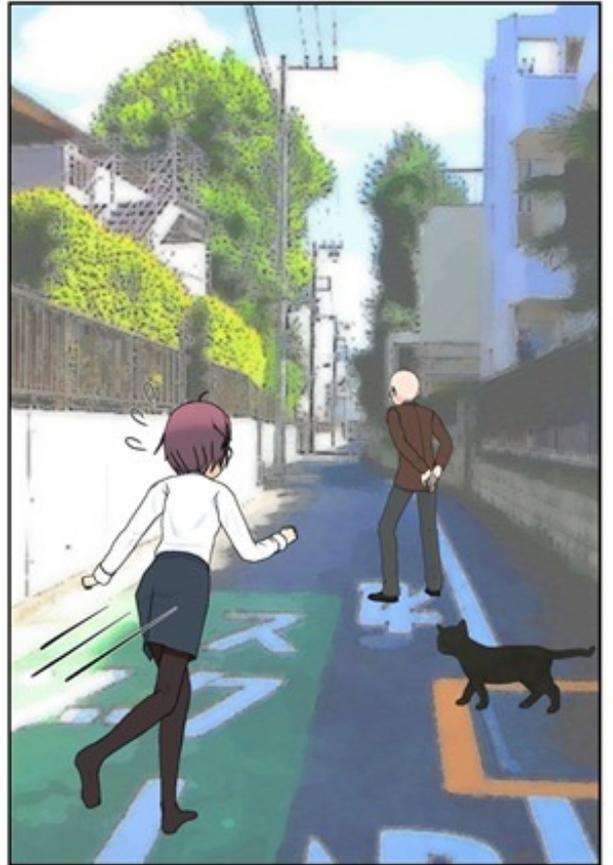
3人目の愛人は愛だ。ヒヒでもなければイタリア人でもない。愛だ。女は自分に足りなかったものは愛と関節の柔らかさだと考えた。関節が硬かったためにイタリア人との情事の最中に捻挫をしたのだ。しかし、今はイタリア人のことは考えずに愛のことについて考える時がついに来たのだ。それはまるで女に光がさしてきた瞬間だった。



女にとって愛はとても難しいことだった。愛のような扱いづらいものを避けて性欲を満たしてきたし、男たちに蹂躪されてもきた。そんなものだと私は思っていた。もしかしたらこれが愛なんだ、と考えたこともあった。しかし、それはもちろん違ったのだ。当然だ、扱いやすいものに深いものなどないのだ。だいたいにして棒的なものは扱いやすかった。実に持ちやすい形をしていた。ギュッと握るだけでよかった。しかし、愛は握ることができない。握ることがすべてだとして考えていたのに、愛は握れないのだ。じゃあ、どうしたら愛を取り扱うことができるだろう？

私は周囲を見回してみた。90歳ぐらいの性欲がなくなったおじいさんが、ヨロヨロと歩いている。この人なら、性欲を度外視して私と愛について語ってくれるに違いない。あんなにヨロヨロして、チンポをおっ立てることもないだろうし。だから、私は今までにないぐらいの速さでおじいさんの方へ走り寄った。つま先立ちで歩いていたおかげで筋力が鍛えられ、いつもより速く走ることができた。おじいさんにかなり近づいたとき、視界の端にヒヒが見え、私はまっしぐらにヒヒに向かってしまった。

ヒヒから発せられる悪臭が私を狂わせる。私はすっかり濡れてしまった。駄目だ。私の愛は性欲と交配しているんだ。私はおじいさんのことなどもう忘れてしまった。忘れ去られるべき存在だったのだ。私は思う存分ヒヒの悪臭を嗅いだ。そして、叫んだ



。

「おじいさん」

私は愛と生きるのだ。愛だ。ヒヒではない。というか、ヒヒなわけがない。愛なのだ。もう性欲は嫌だ。イタリア人とはパスタと一緒に食べられれば良いし、ヒヒは檻にでも入っていてくれ。頭の中では私はそのように考えた。ところが、恐るべきは性欲である。全く私の頭の制御を振り回していることをきかない。私はヒヒ一人では足りないのですおじいさんも情事に参加するように促した。

ヨロヨロのおじいさんにも搾りかすのようになった性欲はある。それを私がすべて搾り取ってやる。私はおじいさんを支配する快樂に震えそうになった。あるいはつま先立ちによる震えだったのかもしれない。おじいさんは女の淫らな姿に70年ぶりに欲情した。自分もかつては若者だったことを思い出したのだ。あの頃、おじいさんの性欲はまるでヒヒのようだった。今、あの「ヒヒの時代」を取り戻すことで、おじいさんは生きる意味も取り戻したようだった。

おじいさんがヨロヨロするようになったのは、丁度チンポが勃たなくなってからだったような気がする。ヒヒになったおじいさんは、早速女に声をかけた。女は自分が求められていることに狂喜した。44歳、そんな私におじいさんは欲情し声をかけてきているのだ。初めて女は愛を感じた。おじいさんの欲望をすべて満たしてあげたい。私の欲望よりもおじいさんの欲望を満たしてあげたい。

70年ぶりに弩長した一物に強引に引きずられるように、おじいさんは女に抱きついた。70年前抱きついた女は、今や100歳を超えていた。途方もない年月がフラッシュバックされた。おじいさんは一瞬だけ失神した。失神した時、光が見えた。はるか太古の昔から人間が感じていた光、生命力、すべてを突き抜けておじいさんを包み込んだ。

「私は生きている。」

おんなはおじいさんを一瞬、神のように感じた。三人目の愛人は、おじいさんだったのだ。イタリア人、ヒヒ、おじいさん、この三人を私は求めていたのだ。事実、44年間、女はこの三人の愛人を亡霊のように探しつづけたのだ。おじいさんから出たわずかな液体を私は一心に受け止めた。その後、ヒヒの大量の液体も受け止めた。遠くでイタリア人の野太い声が聞こえる。もう私は以前の私でない。おじいさんに会う前の私はただの44歳の女だった。おじいさんの年齢による輝きの前に、私は自分の年齢をすっかり忘れ去った。そして性欲のままに生きることで愛をも忘れ去った。でも私は本当にそれで良いのだろうか？愛はどこへ言ったの？イタリア人とヒヒとおじいさんは愛に変わるものなの？



公園の砂場で、息子の赤太郎は大きな山をつくっていた。「赤ちゃん、大きな山をつくったね。」私はその山の大きさに満足した。おじいさんと会ってから23年、今では私も一児の母なのだ。そういえば、赤太郎が作った山の大きさは何かに似ている。何か途方もない過去か未来に、その大きさを目の当たりにしたことがあった。私が考えていると、赤太郎が砂場に脱糞をし始めた。私はぼんやりとその様子を眺めながら、自分は誰かをずっと待たせつづけているんじゃないか、とフツと思った。あの場所に赤太郎と二人で行こう。

バスターミナルへ夜行バスが止まった。赤太郎の手が少し冷たくなっている。春とはいえ、夜になるとまだ寒いのだ。眠たい顔をする赤太郎をバスの中へ連れて行き椅子に座らせると、すぐに赤太郎は眠ってしまった。毛布を掛けてあげたいと思い、バスの運転手に近づくと、その運転

手の顔は私の記憶の中に強烈に残っている見知った顔であることに気付いた。

その運転手は、横にいる女と何か難しい話をしているようだった。その女は突然運転手の顔面をハイヒールで蹴り上げた。たちまち運転手はゲロを吐いた。ハンドルがゲロまみれになった。その様子を双眼鏡で眺める男がいた。私は赤太郎がまだ眠っていることを確認して、双眼鏡の男のもとにつま先立ちで走った。私は男の双眼鏡を取り上げると、男は不思議な様子で私を眺めたが、すぐに私が誰であるかを悟ったようだった。

「ポーノ、ポーノ、ボン・ジョルノ」

金髪、長身、筋肉質、今でも男は変わっていない。ジローラモ・パンツエッタだ。私は双眼鏡を反対にして男を眺めると、男は非常に小さく見えた。そうか、こういう風に男を見るべきなのだ。私はいままで男を肥大化させていた。今まで見てきた男たちをこの双眼鏡で眺めると、どれも極小の存在だったような気がしてきた。14cmも8cmもそんなに変わらない。何を6cmで一喜一憂していたのだ！ところで私はイタリア語がわからない。ジローラモとはもうおしまいだ。こんなイタリア人はもう私にはどうでもいい。なぜなら私は愛を知っているからだ。

「おじいさん、あなたのムスコは、ほら、こんなに大きくなりました。」

私は赤太郎の寝顔を見ながら、バスがおじいさんのもとに近づいていくのを感じていた。



## 女の難しい話

<http://p.booklog.jp/book/29138>

著者 : goseisyashin

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/goseisyashin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29138>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29138>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.